

余嘉錫『古書通例』『目錄学発微』の版本と成立過程

嘉 瀬 達 男

余嘉錫（二八八四—一九五六）は中国近代を代表する文献学者である。ところが余氏が生前に公刊した著書は、『四庫提要弁証』と『宋江三十六人考実』の二書にとどまった。文献学者として今なお余氏の評価を高め続けている『古書通例』『目錄学発微』は大学の講義録であり、初めて公刊されたのはそれぞれ著者没後の一九八五年と一九六三年である。両書は公刊前より講義録のまま重んじられ、多くの学者に引用され、また翻印された。そして公刊後、なお多数の出版社より版を改め刊行され続け、余嘉錫文献学の神髄を伝える名著とされている。

講義録であった『古書通例』『目錄学発微』は、改訂された数種類の版が印行されており、今はいくつかの図書館に収蔵されている。没後に公刊された版は、余氏の女婿が晩年の講義録をもとに編集したもののだが、なお多くの問題を残している。つまり『古書通例』『目錄学発微』には多数の版本があるものの、著者による決定稿は存在しない上、調査してみるといずれの版本にも問題があり、定本とすべきテキストを定めたいのである。

筆者はかつて『古書通例』を古勝隆一・内山直樹両氏とともに翻訳出版し（二〇〇八年、平凡社、東洋文庫）、現在『目錄学発微』の翻訳出版作業を両氏とともに進めている。こうした翻訳作業に際し、両著最善のテキストを求めて調査した諸版本について、この場を借りて検討結果を報告したい。全ての版を把握できたわけではないが、主要なもの調査できたものと思う。その結果をもとに余嘉錫文献学成立の一過程を探ってみたい。

一、『古書通例』の版本について

まず、『古書通例』の版本について検討しよう。余氏生前の講義録について筆者は、日本国内の大学図書館に所蔵される三本のほか、北京大学図書館の一本と中国国家図書館にある四本を調査した。まずこの八本と、一九八五年に初めて公刊された上海古籍出版社本、近年刊行された余嘉錫古籍論叢本の書誌事項を示そう。なお『古書通例』は、上海古籍出版社本以外では『古籍校讀法』と題されているが、現在広く通行しているのは上海古籍出版社本とその翻印本であるから、小論で総称する時は『古書通例』と呼ぶ。

【立命館大学本】

古籍校讀法三卷、(附)古歴法一卷、余嘉錫撰、(歴)近人范文瀾撰

民国刊、活版、一冊、二七×十五センチ、三八字×十二行(注小字双行)、七十葉、(歴)三八葉、線装

版心、单黒魚尾、「中國大學講義」「古籍校讀法」「古歴法」

封面墨書、「中大未竟講義、峻忱題、古籍校讀法、古歴法」。近人峻忱・平中苓次自筆書入本

【関西大学本】後期本系統

古籍校讀法四卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、北京大学出版部、一冊、二七センチ×十五センチ、四十字×十三行(注小字双行)、七一葉、線装
版心、单黒魚尾、「古籍校讀法」「北京大学／出版部印」

書扉木筆署名「袁守和」。長沢規矩也旧蔵

【大東文化大学本】

古籍校讀法四卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、北京大学、一冊、二六×十五センチ、四十字×十三行（注小字双行）、七一葉、線装

版心、单黒魚尾、「古籍校讀法」「北京大学」

封面墨書「古籍校讀法」「余嘉錫」。蔵印「寒泉書屋」。麓保孝（寒泉）旧蔵

【北京大学本】後期本系統

古籍校讀法四卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、北京大学、一冊、目錄學發微と合帙、二六×十五センチ、四十字×十三行（注小字双行）、（版心）

七一葉（前五葉を欠く）、線装

版心、单黒魚尾、「古籍校讀法」「北京大学出版部」

封面墨書「古籍校讀法」、封面印「燕京大學圖書館蔵印」、卷頭印「燕京大學圖書館珍藏」

【国家図書館本一】後期本系統（図二）

古籍校讀法四卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、北平・輔仁大學（大北印書局）、一冊、二三×十五センチ、三二字×十三行（注小字双行）、八三葉、

線装

版心、線黒口無魚尾、「古籍校讀法」「輔仁大學」「大北印書局代印」

墨筆眉批（欧近 Paul Siao）、卷首署名「欧近 Paul Siao 1st October 31」

【国家図書館本二】後期本系統

古籍校讀法四卷、(坳)〔漢書〕藝文志一卷、東安日程一卷、〔余嘉錫〕撰、(坳)漢・班固、清・姚晉圻
 民国刊、活版、一冊、二六×十五センチ、四十字×十三行(注小字双行)、(藝)十四葉、(東)十六葉、(古)六八
 葉、線装

版心、单黒魚尾、(藝)「目錄學講義」「本科」「中法大學服爾德學院」、(東)「目錄學」「中法大學服爾德學院」、(古)
 「校刊學講義」「中法大學服爾德學院」
 木筆書入

【国家図書館本三】後期本系統

古籍校讀法四卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、北平・輔仁大學(大北印書局)、一冊、二三×十五センチ、三二字×十三行(注小字双行)、八三葉、
 線装

版心、線黒口無魚尾、「古籍校讀法」「輔仁大學」「大北印書局代印」
 印「陳垣同志遺書」。陳垣旧蔵

【国家図書館本四】(図一)

古籍校讀法四卷、(坳)弁服名物(三禮名物之一)一卷、余嘉錫撰、(弁)近人吳承仕撰

民国刊、活版、北京大學出版部、一冊、二七×十五センチ、四十字×十三行(注小字单行/双行)、目錄八葉、提要
 二葉、(弁)本文四六葉、(古)七一葉、線装

版心、単黒魚尾、(弁)「三禮名物」「弁服名物」「北京大學／出版部印」、(古)「古籍校讀法」「北京大學」印「佩韋藏書」

【上海古籍出版社本】

古書通例四卷、余嘉錫撰

一九八五年七月刊、上海古籍出版社、一冊、A五判、一三〇頁

周祖謨前言「現在根拠一九四〇年排印本整理、分別段落、重加校訂・標点、以供研究和整理古籍者参考。」

【余嘉錫古籍論叢本】

余嘉錫古籍論叢（文津文庫之一）

古籍校讀法四卷、書冊制度補考、古籍序跋、讀已見書齋隨筆、余嘉錫撰

二〇一〇年十月刊、北京・國家圖書館出版社、一冊、A五判、一七五頁

出版説明「本書所收《古籍校讀法》據國家圖書館藏民國年間北平輔仁大學鉛印本重排」

講義録は、刊記の類が一切示されていない。当時の他の講義録の多くがそうであったように、大学内外の印刷所で排印刊行され、学内での流通を目的としたためであろう。ただ、講義を行なった大学名が版心に印刷されているので、それによって版本の系統をある程度考えることができる。大学名を挙げてみると、「北京大學」（関西大学本、大東文化大学本、北京大学本、国図本四）、「輔仁大学」（国図本一・国図本三）、「中国大学」（立命館大学本）、「中法学院服爾德学院」（国図本二）がある。

『古書通例』版本系統表（括弧内は版心）

		【後期本系統】	
		国図本二（中法学院）	
		国図本一 国図本三（輔仁大）	
	大東文化大本 国図本四（北京大）	関大本 北京大本（北京大）	『古書通例』 上海古籍出版社
立命館本（中国大）			『余嘉錫古籍論叢』 国家図書館出版社

このうち版心に「北京大学」とある関大本と北京大本を調査してみると、両本に差異は全く見当たらないので、同一の版本と考えられる。そして、関西大学と北京大学には『目錄学発微』も収蔵されており、やはり版心に「北京大学」と印され差異のない同版と考えられるから、両校には同時期の版が二冊一組で所蔵されているようである。ほかに「輔仁大学」の名のある国図本一と国図本三にも違いはなく、同一版本である。

これら国図本一・国図本三と関大本・北京大本を比較すると、文字に多少の異同があり、版式も異なるものの、文章や内容に大きな差異はなく、ほぼ同じ頃に印行された系統の近い版本と考えられる。そして、版心に「中法学院服爾徳学院」とある国図本二も、上記四本との違いは小異が認められる程度であるから、ほぼ同じ頃に印行された系統の似た版本と考えられる。

他方、立命館本と大東文化大本・国図本四（大東文化大本・国図本四は同版。図一）は、上記五本（以後、後期本系統と呼ぶ）とは明らかに異なる点がいくつか見出せる。まず、巻一冒頭に置かれた書名・著者名の後、巻一の

篇題「案著録第一」の下に小字で「凡三篇」と印字されている点である。この三本以外の『古籍校読法』は、全て「凡四篇」と印しており、実際に四篇ある。大東文化大本・国図本四も四篇あるが、立命館本のみ卷三の第七一葉以下を欠失した三篇本である。文章が第七十葉で途切れる欠落本であるから速断はできないものの、当初三篇本であった可能性も考えられる。以下にその点を少しく探ってみよう。

立命館本が他の四篇本より不足しているのは、卷三の二葉分と卷四の六葉分であるが、立命館本の卷三には一葉分の重複がある。卷三の丁合の際、誤って一葉が重複したために、卷三の末尾二葉の欠落を招いた可能性がある。そして立命館本は、『古籍校読法』の後ろに范文瀾『古歴史法』を合わせて綴じ込んだ一冊本である。製本の状態は相應の経年を感じさせるから、最近の製本ではなからう。とはいえ本の保存状態が悪いわけではないので、卷三の二葉と卷四の六葉全てが破損したとは考えにくい。

(図一) 『古籍校読法』 国図本四



既に数本を比較してわかるように、『古書通例』は著者によつて修訂が何度も重ね続けられた本である。そして最後の一文に示されるように未完の書である(後述)。第四篇の内容が他の三篇に比べ三分の一から四分の一と極端に短いことから見ても、第四篇は最後に増補された一篇であったと思われる。このように立命館本・大東文化大本・国図本四に印された「凡三篇」は単なる誤植ではなく、第四篇をもたない三篇本が存在したことを疑いたくなるのである。

話を戻し、後期本系統と立命館本・大東文化大本・国図本四の比較を続けたい。ほかに後期本系統と明確な違いとして

指摘できるのが、立命館本・大東文化大本・国図本四のみ緒論に資料として『法言』吾子篇の文を二条引用している点である。余嘉錫が『目錄学發微』の講義録を改訂した際には引用資料を増補することが多く、削除することは稀である。ところが緒論を繰り返し読み、この『法言』の引用について考えてみると、増補ではなく、立命館本・大東文化大本・国図本四にあった資料を後期本系統が冗漫を厭って削除したように考えられる。実際に一九四〇年の排印本に拠ったという上海古籍本は、後期本系統より更に引用資料が少なくなっている（後述）。

後期本系統と大東文化大本・国図本四の違いをもう一点指摘したい。それは卷末の一文にある。立命館本はこの部分を欠いているので、比較できないが、後期本系統では「其説甚繁、別詳於後。與此可以互考也（その説は繁雑になるの、また後に詳述する。この部分とともに参照してほしい）」とするのに対し、大東文化大本・国図本四は「其説甚繁、別具於後、與此參觀而互考之可也（その説は繁雑になるの、また後に述べる。この部分と参照してほしい）」に作っている。意味内容に変わりはなく、表現の差異であるが、元となる原稿が異なっていたことは明らかであろう。なお、上海古籍本は「其説甚繁、當別詳述」としており、後期本系統・大東文化大本・国図本四とも異なっている。

以上に述べた通り、余氏生前の講義録の版本は、大きく後期本系統、立命館本、大東文化大本・国図本四に分けられ、立命館本と大東文化大本・国図本四の版も近い版と思われる。そして後期本系統は本文・版式とも比較的整っているのに対し、立命館本と大東文化大本・国図本四は行数が不揃いで、誤字脱字など混乱が多いので、後期本系統に先行するものと考えられる。

一方、余氏没後に出版社より刊行された版本は二系統ある。その一つは一九八五年に上海古籍出版社より刊行された版である。この本は、余氏の女婿で著名な言語学者である周祖謨が、一九四〇年の排印本によって分段して整理し、更に校訂と標点を加え出版したものである。この本によって『古籍校誦法』は、初めて公刊されたのである。

出版部数は一万三千五百部にとどまり、まもなく絶版となったが、その後あまたの出版社がこの本に基づいた影印本や、版式まで改めた翻印本を出版しており、現在もつと流通している版である。本書は周祖謨の手を経た校訂本であり、講義録に見られた誤植や脱字の多くは正されたものの、なお文字や引用の誤りは多く残されている。後期本系統、立命館本、大東文化大本、国図本四のいずれとも版は異なるらしく、文字の異同が多い上、引用資料が少なくなっている。そして、この本のみ書名を『古書通例』と称している。

出版社の刊行したもう一種類の版本は、二〇一〇年に北京の国家図書館出版社が出した版である。同社の文津文庫に収められ、『余嘉錫古籍論叢』と題された二冊の中に、余氏の「書冊制度補考」「古籍序跋」「説已見書齋」随筆」とともに収録されている。この版は、同書の出版説明に国家図書館所蔵の輔仁大学排印本に拠ったとあり、国図本一・国図本三を底本としている。国図本一・国図本三と余嘉錫古籍論叢本を比較すると文字の異同は見当たらない。ただし上海古籍本に倣い、分巻分章を施している。

二、『古籍校讀法』の書き入れと刊行時期

以上、『古書通例』の諸版本を比較検討したが、講義録であった『古籍校讀法』はいずれも刊年を定めがたく、ただ各本の版式および内容の異同から前後関係を推測するにとどまった。ところが幸いなことに講義録として学生に提供されたから、現存する『古籍校讀法』には学生による書き込みが数多く見られる。中でも国図本一(図二)の書き込みは興味深く、刊年を推測する手掛りを与えてくれる。まず巻首の欄外に「欧近/Paul Siao/Ist October 31」という黒インクによる署名がある。「欧近 Paul Siao」は所有者の名前であろうが、詳細はわからない。上海古籍本の周氏前言に『古籍校讀法』は一九三〇年代の講義録と言うから、「Ist October 31」は一九三一年十月一日のことであろう。更に、巻一の欄上や本文には日付らしき数字が黒インクの同一書体で書き込まれている。図二の

(図二)『古籍校讀法』国図本一



9/10 (5葉)
20/10 (9葉裏)
22/10 (10葉)
27/10 (11葉)
29/10 (11葉、11葉裏)
3/11 (11葉裏)
5/11 (11葉裏)
10/11 (12葉)
17/11 (12葉裏)
19/11 (13葉)
17/12 (14葉)
22/12 (15葉)
24/12 (15葉裏、17葉)
29/12 (18葉、18葉裏)
7/1 (22葉)

下にその数字と位置（葉数と表裏）を示す。

これらの数字が講義日であるとすれば、十月九日より十五回分の記録である。同じ日付が二回あるのはもしかすると、一日に二回講義を行ったのかもしれない。暦を調べてみると、火曜が七回、木曜が七回、十月九日だけ金曜である。³⁾十一月二十日から十二月十六日の日付は見えない。一九三一年と言えば、九月に瀋陽で満州事変が勃発し、十一月に毛沢東らによって共産党の政府が江西省に樹立されている。こうした動乱の時期に北京で開かれた講義の記録と考えるとよからう。一月七日以後の書き込みはない。

この書き込みから、国図本一は一九三一年には印行されており、講義に用いられていたと考えて問題なからう。更に国図本一を含む後期本系統の五本も一九三一年を前後する時期の本である可能性が高い。そうすると後期本系統の諸本は、上海古籍本が拠っている一九四〇年排印本よりも古い版ということになる。後期本系統より混乱の多

い立命館本、大東文化大本・国図本四は更に古い版であると思われる。

三、『目録学發微』の版本について

『古書通例』については都合十本の版を比較したが、『目録学發微』は更に版の種類が多い。『古書通例』に比べ、講義を開いた回数が多いのかもしれない。また余嘉錫も盛んに改訂を行ったようである。それらは著者生前の講義録として印行された版と、没後に女婿周祖謨が校訂を加え、中華書局と巴蜀書社からそれぞれ出版した本、及びこの中華書局本の影印本や翻印本に大きく分けられる。以下に書誌事項を記す。

【東京大学本一】北平師範大学本系

目録学發微不分卷、付図、余嘉錫撰

民国、排印、一冊、二六×十五センチ、四十字×十三行（注小字双行）、九八葉、線装

版心、单黒魚尾、「目録學」「國立北平師範大學」

印「東方文化学院圖書印」。墨筆書入

【東京大学本二】北京大学本系

目録学發微不分卷、余嘉錫撰

民国、北京大学出版部排印、二冊、二六×十三センチ、四十字×十三行（注小字双行）、九七葉、線装

版心、单黒魚尾、「目録學發微」「北京大学／出版部」

倉石武四郎旧蔵

【関西大学本】 北京大学本系

目錄學發微不分卷、付函、余嘉錫撰

民国刊、活版、北京大学出版部、一冊、二七×十五センチ、九四葉、四十字×十三行（注小字双行）、線装

版心、单黒魚尾、「目錄學」「北京大學」

書扉木筆「袁守和」。長沢規矩也旧蔵

【同志社大学本】 北平師範大学本系

目錄學發微不分卷、付函、余嘉錫撰

民国刊、活版、国立北平師範大学、一冊、九八葉、二六×十五センチ、四十字×十三行（注小字双行）、線装

版心、单黒魚尾、「目錄學」「国立北平師範大學」（又、「北平国立師範大學」）

書扉墨書「原樹敏 文保堂」

【大東文化大学本】 開宗明義本系

目錄學發微不分卷、付函、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二七×十六センチ、四十字×十三行（注小字双行）、九二葉、線装

版心、单黒魚尾、「目錄學發微」

封面墨書「古籍校讀法」「余嘉錫」

蔵印「寒泉書屋」。麓保孝（寒泉）旧蔵

【国家図書館本一】北平師範大学本系

目錄学発微不分卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二六×十五センチ、四十字×十三行（注小字双行）、九七葉、線装

版心、单黒魚尾、「目錄学」「国立北平師範大學」

封面墨書「援菴先生教正／嘉錫謹呈／目錄學發微」

【国家図書館本二】開宗明義本系

目錄学発微不分卷、付図、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二三×十七センチ、四五字×十六行（注小字双行）、一三六頁、洋装

印「長樂鄭氏臧書之印」。鄭振鐸旧蔵

【国家図書館本三】開宗明義本系

目錄学発微不分卷、付図、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二八×十六センチ、四十字×十三行（注小字双行）、九二葉、線装

版心、「目錄学発微」

印「邢雲林」

【国家図書館本四】開宗明義本系

目錄学発微不分卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二七×十五センチ、三八字×十三行（注小字双行）、一〇三葉、線装
 版心「中國大學講義」「目錄學發微」

【国家図書館本五】北京大学本系

目錄學發微不分卷、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二七×十五センチ、四十字×十三行（注小字双行）、九四葉、線装

版心、单黒魚尾、「目錄學」「北京大學」

封面墨書「此未完全不知余氏當日曾否寫成以無／別本始購存之／甲申六月九日以百金得於友人／吳氏所設之文華閣友荒」

印「長樂鄭振鐸西諦藏書」「長樂鄭氏臧書之印」。鄭振鐸旧蔵

【国家図書館本六】古本（図三）

目錄學發微不分卷、付函、余嘉錫撰

民国刊、活版、民国大学印刷部、一冊、二六×十六センチ、三五字×十三行（注单行）、九六葉、線装

版心、单黒魚尾、「目錄學」「民國大學講義」「本校印刷部印」、各葉枠外右下「余嘉錫」

版心葉数「三十五、三十六、三十七、三十八、三十九」を「五十五、五十六、五十六（重出）、五十七、五十八、五十九」に、「七十、七十一」を「三十、三十一」に誤る。

第四六、四七、四八、四九葉重出。

【北京大学本】北京大学本系

目錄學發微不分卷、付函、余嘉錫撰

民国刊、活版、北京大学、一冊、古籍校讀法と合帙、二六×十五センチ、四十字×十三行（注単行）、九四葉、線装
 版心、单黒魚尾、「目錄学」「北京大学」「古籍校讀法」「北京大学／出版部印」

封面墨書「目錄学 余嘉錫」

印「燕京大學圖書館藏印」「燕京大學圖書館珍藏」

【工農本】開宗明義本系（函四）

目錄学發微不分卷、付函、余嘉錫撰

民国刊、活版、一冊、二三×十七センチ、四五字×十六行（注小字双行）、一三六頁、洋装
 印「北京大学附設工農速成中學圖書室」。家藏

【中華書局本】

目錄学發微、付函、余嘉錫撰

一九六三年三月、北京・中華書局刊、一冊、A五判、一五四頁
 周祖謨前言「現在根拠著者晚年增訂校正標点、特為印出。」

【巴蜀書社本】

目錄学發微四卷、付函、余嘉錫撰

一九九一年五月、成都・巴蜀書社刊、一冊、A五判、一五三頁
周祖謨前言「取作者手校批注本与一九六三年印本对勘、印本中有脱字处和注解不完備处都得抛手校批注本加以刊正増補。」

四、『目錄学発微』講義録

まず、著者生前に講義録として用いられていた版を整理してみる。講義録で筆者が目録しえたのは十三本である。まず日本国内では東京大学東洋文化研究所の蔵本を二本、ほかに関西大学、同志社大学、大東文化大学の蔵本を調査できた。中国では北京大学図書館の蔵本を一本、国家図書館古籍館の蔵本を六本調査した。更に中国の古書店より筆者が購入した一本（工農本）を加え、都合十三本である。

〔『目錄学発微』講義録版本系統表（括弧内は版心）〕

国図本六（民国大学）	関大本 Ⅱ 北京大本 Ⅱ 国図本五（北京大）	国図本一（北師大）	大東文化大本 Ⅱ 国図本三 国図本四	開宗明義本系・線装	国図本二 Ⅱ 工農本 開宗明義本系・洋装
		東大本一（北師大） 同大本（北師大）			

調査した十三本は、『古籍校読法』同様に諸本いずれも刊記のない、活版本である。そしてやはり『古籍校読法』同様版心には講義に使用したと思われる大学名がいくつか見えている。特に多いのが「国立北平師範大学」と「北京大学」の名であるから、始めにこの二系統の版を整理してみる。

版心下部に「国立北平師範大学」と印刷されている本は、東京大学東洋文化研究所（以下、東大本一と略称）と同志社大学（同大本）、中国国家図書館（国図本一）に各一本ある。版式はいずれも四周双边無界、四〇字×十三行で、版心上部には「目録學」と題されている。三本とも「目録書之體制四」以前の書名や人名の多くに波線や傍線が引かれており、巻末に「目録要籍提要」が付録されている。三本とも全九八葉あるが、国図本一と東大本一は第二十二葉の版心を「又二一」としている。ただし国図本一と東大本一も書名や人名の波線や傍線の位置が異なっている。そしてこの三本は改訂箇所がそれぞれ少しく異なっているので、非常によく似てはいるが別版である。また、この三本は刊行の先後も見定めがたい。以下ではこの三本を北師大本系統と呼ぶことにする。

版心下部に「北京大学」と印刷されている本は、東京大学東洋文化研究所（以下、東大本二）と関西大学（関大本）、中国国家図書館（国図本五）、北京大学（北京大本）にある。版式はいずれも四周双边無界、四〇字×十三行で、版心に単黒魚尾がある点、北師大本系統と同じである。そして東大本二以外は巻末に「目録要籍提要」も付録されている。国図本五と東大本二は表を欠くが、表の叙例は残されている。四本ともに北師大本系統にあった波線や傍線はない。このうち関大本と国図本五、北京大本の三本は本文に差異は見当たらず同一版本である。東大本二は別版である。両版本の差は、関大本・国図本五・北京大本は版心上部に「目録學」と題するのに対し、東大本二は「目録學發微」とすること、全体の葉数が関大本・国図本五・北京大本は九四葉であるが、東大本二は九七葉ある点などに見出せる。本文や内容では関大本・国図本五・北京大本は引用資料など東大本二よりいささか少なく、次に挙げる国図本六とほぼ同じである。この四本を以下、北京大本系統と呼ぶ。

以上、北師大本系統と北京大本系統は、講義録の中でも比較的古いものと考えられる。北京大本系統の関大本・国図本五・北京大本と本文は近いものの、版心に「目錄學」「民國大學講義」「本校印刷部印」と印されている線装本が、中国国家図書館(国図本六・図三)にある。この本は、第三四葉までは印刷された句読点の上に墨筆で同じ句読点が重ね書きされているが、三五葉以降は最後まで句読点が印刷されていない無点本である。ただし、引用符号の鍵括弧は存している。また、北師大本系統などと異なり、注を小字双行にせず単行を丸括弧で括っている。四周双边無界、三五字×十三行、九六葉であり、「目錄要籍提要」はない。このように国図本六は、北師大本系統や北京大本系統と異なり版式が簡略である。そして関大本・国図本五・北京大本と同程度に文字数も少ない。『目錄學發微』の版本の中ではより古い本であると考えられる。

講義録の中で、北師大本系統や北京大本系統と大きく異なり、後出と考えられるのは中国国家図書館(国図本二)と工農本(図四)である。洋装本で無粹、一三六頁あり、柱には頁数の上部に「目錄學發微」と印刷されており、同一版本である。他本との大きな違いは三点ある。まず、洋装本であること。次に、第一篇「目錄學之意義及其功用」を「開宗明義篇第一」(『孝經』第一章の名。)としていること。もう一つは、卷末付録の「古今書目分部異同表」の序にある。ここにはまず、「古今書目分部異同表」のほか「分類沿革表」を作ったことが記されているが、これは他のいくつかの版本にも見える。他本と異なるのは、その後の小字双行注に「分類沿革表未成容俟續出(「分類沿革表」はまだ完成していない。以後出版の予定)」という十一字が加えられていることである。そし

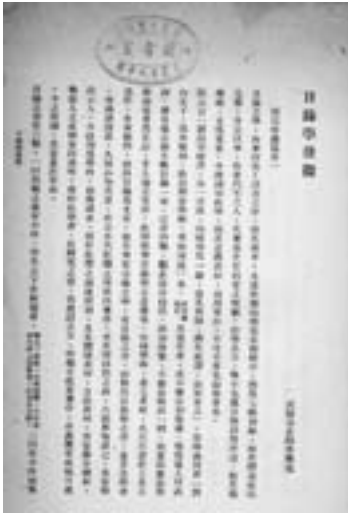


(図三)『目錄學發微』国図本六

て十三本の中で洋装本はこの二本のみであるから、最後出の版と考えられる。

そしてこの二本と同じ特色をもつ線装本が、大東文化大本、国図本三と国図本四である。この三本は、第一篇を「開宗明義篇第一」とし、巻末付録の序に小字双行で「分類沿革表未成容俟續出」の十一字を注しているが線装なので、国図本二・工農本に先行する版と思われる。版式は、四周双辺無界、単黒魚尾であり、大東文化大本・国図本三は四〇字×十三行、九二葉、国図本四は三八字×十三行、一〇三葉である。大東文化大本と国図本三の版心は「目錄学発微」と題が見えるのみで、印行所は示されていないが、差異は見当たらないので同版であろう。国図本四は版心の上部に「中國大學講義」とあり、その下に「目錄学発微」とあるほか、第一篇「開宗明義篇第一」の「明」字を「期」字に誤り、墨筆で訂正している。以下ではこれら第一篇を「開宗明義篇」とする、国図本二・工農本・大東文化大本・国図本三・国図本四を開宗明義本系統と呼ぶ。

(図四) 『目錄学発微』工農本



以上のように、講義録は大きく北師大本系統と北京大本系統、

開宗明義本系統に分けられる。本文や内容を比べると前二者は開宗明義本系統より引用資料が少なく、余氏の文も後の周氏校訂本と異なることが多いので、『目錄学発微』の中では初期の本と考えられる。北師大本系統と北京大本系統の東大本二は小差が認められるものの、ほぼ同時期の本であろう。国図本六と関大本・国図本五・北京大本は引用資料が更に少ないので、より古い版と考えられる。

それに比べ開宗明義本系統は、周氏校訂本に近く、より新しい版と考えられる。開宗明義本系統のうち、大東文化大本・国図本

三と国図本四は、以上の北京大本系統と北師大本系統の後になると考えられる。そして洋装本の国図本二と工農本が著者生前の版では最後になる。

十三本のうち同一だったのは、関大本と国図本五・北京大本の三本と、大東文化大本と国図本三、国図本二と工農本である。残りが六本あるから、著者生前の版は九種類見たことになる。余嘉錫が講義を行っていたのは二十年程度と考えられるから、改訂の頻度は比較的多いものと言えよう。ただ、『目錄学発微』十三本を調査して疑問を感じるのには、余嘉錫の本務校であった輔仁大学の刊本が一つとして見当たらないことである。『古籍校読法』の講義録は八本のうち二本が輔仁大学であったことを考えると尚更である。そこで『目錄学発微』の中でも後期の版である開宗明義本系統の数の多さや、余嘉錫が本務としていた時期と重なることを考えると、開宗明義本系統の諸本が輔仁大学で用いられていた可能性を考えてよいと思われる。

五、『目錄学発微』余氏没後公刊本

『目錄学発微』は余氏没後七年を経た一九六三年、『古書通例』同様周祖謨によって初めて公刊される。周氏の序によれば、著者晩年の増訂本を校正し、標点を加えたものである(二四六頁参照)。中華書局本は開宗明義本系統を受け継ぐもので、特に洋装の開宗明義本の版式をよく残している。両本とも一行につき四五字の縦書きで、開宗明義本が各頁十六行のところを、中華書局本は十五行にしている。また、引用資料の書名・篇名を亀甲括弧でくくるなど、基本的な版式が非常によく似ている。ただし、中華書局本は書名や人名に傍線を加え、双行小字注を単行小字注に改めている。ところが本文を比較してみるとその違いはきわめて大きい。中華書局本は開宗明義本の多くの誤植を訂正し、特に引用資料の校訂は枚挙するに暇がないほどである。また開宗明義本まで引用されていなかった資料が、中華書局本では多数増補されているが、同時に余嘉錫の文章が改められている部分も少なくない。両者の

字数を比較してみると、中華書局本は約六千字ほど増加している。しかし惜しいことに、何箇所か中華書局本が誤ったところもある。

中華書局本の発行部数はわずか二千七百部にとどまり、まもなく絶版となった。台湾や香港ではこの本が影印出版されたが、読書子の需要に応えるものではなかった。そこで一九九一年、成都の巴蜀書社より再び周祖謨の手によって新版が刊行される。周氏によれば巴蜀書社は、著者の手校や批注に基づき中華書局本の脱字や注釈の不備を訂正し増補を加えたものという(二四五頁参照)。この本は、体裁を大きく変更したのが特色である。従来の縦書きを横書きに改め、全十篇の不分巻であったのが、巴蜀書社本では「目錄書体制一〜四」を巻二、「目錄学源流考上・中・下」を巻三にまとめ、はじめて四巻本としたのである。中華書局本に付されていた文中の書名や固有名詞の傍線はすべて廃され、巻頭には余嘉錫の肖像写真が掲げられている。本文は大きな増補を数箇所にし、中華書局本の誤植をいくらか訂正しているものの、また新たな誤植が数箇所が生じている。そして活字の配列が不揃いな部分が多く、なお善本とは言い難い。ちなみに巴蜀書社本を国図本六や関大本などと比較してみると、「目錄学源流考下」篇などは二倍に近い量になっている。ただしこの巴蜀書社本も発行部数は二千部余りに過ぎなかった。その結果、中華書局本を用いた影印本や、版式のみ改めた本が今なおさまざまな出版社より刊行され続けている。

六、『目錄学發微』の書き入れについて

『古籍校読法』同様、『目錄学發微』にも旧蔵者の記名や蔵印、無数の書き入れがある。たとえば国図本一には、封面に「援菴先生教正／嘉錫謹呈／目錄学發微」と墨書がある。余嘉錫が陳垣(一八八〇—一九七一)に贈呈した陳垣旧蔵本なのであり、墨筆による誤植の訂正と赤鉛筆による傍線や丸印が加えられている。国家図書館にはかの鄭振鐸の蔵印をもつ旧蔵本も二本収められている(国図本二・国図本五)。そのうち国図本五の封面には「此未完全

不知余氏當日曾否寫成、以無別本、始購存之。甲申六月九日、以百金得於友人吳氏所設之文華閣。友荒。」と墨書されている。⁷「友荒」は鄭振鐸の筆名である。未完の疑いをもちつつも北京大学系統の古本を友人より購入したのであらう。

ほかに長沢規矩也旧蔵の関大本には、書扉に鉛筆で「袁守和」と記名されている。袁守和は袁同礼（一八九五—一九六五）、一九四二年に北平図書館（現中国国家図書館）の館長となっており、一九四四年には北京大学で目錄学を講義した人である。同大本は書扉に原政庭（一九〇三—一九二二、後の陝西省師範学院副院長）の名が見える。原氏は一九二九年から三年に北平師範大学の歴史系に在籍しているから、あるいは余嘉錫の講義を受けた学生であったかもしれない。東大本一には「東方文化学院圖書印」があり、東洋文化研究所の原簿によると一九三二年に収蔵されたとのことである。そして東大本二は倉石武四郎旧蔵書である。

こうした所蔵者の記録や無名氏の書き入れを見ると、百年前これらの本の置かれた情景が目に見えるようである。ところが以上の調査を以てして、なお明確にできないのが、講義録の『古書通例』『目錄学発微』各本の刊行年である。余嘉錫文献学の成立を考える上でも極めて重要な点であるが、刊記をもつ版が一つとしてないので、各本の正確な刊行年を考えることは誠に困難である。そこで最後に、『古籍校読法』『目錄学発微』の成書時期について、想定可能な時期を検討してみたい。

七、『古籍校読法』『目錄学発微』の成書時期について

『古籍校読法』『目錄学発微』はいずれも北京の大学での講義用に印行されているから、まず初めに余嘉錫がいつ北京に上京し、講義を始めたのかを見ておきたい。余氏は上京後まもなく『古籍校読法』『目錄学発微』の講義を開始したと考えられているので、上京時期と『古籍校読法』『目錄学発微』の成立時期はほぼ重なると考えられている。

ところが上京及び成書の時期には諸家異なる見解があり、必ずしも明確ではない。初め周祖謨は中華書局本『目錄学発微』序文に一九三二年上京、『目錄学発微』は一九三二年から四八年の間の講義録と述べた。ところが巴蜀書社本『目錄学発微』序では、一九三〇年上京、『目錄学発微』は一九三〇年から四八年の間の講義録と述べている。そして『古書通例』はその序に、一九三〇年代の講義録としている。このほか周氏が一九三〇年上京したと述べる巴蜀書社本『目錄学発微』は、表紙裏に付された作者簡介で一九二九年より北京の各大学で主に目錄学を講じたという。

更に早く、一九二七年上京の可能性を示すのが『陳垣来往書信集』所載の余氏書簡である。一九二七年に余嘉錫が陳垣に送った書簡に、余嘉錫が民国大学で担当する科目の変更を願う文面がある。陳垣の紹介でこの頃民国大学に出講していたことを示している。また『輔仁大学 会友貝勒府』も一九二七年に余嘉錫が輔仁大学国文学教授になったとする。このように諸説ある中、現在最も信頼されているのは周氏の妻であり、余氏の息女の余淑宜が周祖謨と連名で発表した「余嘉錫先生伝略」の説である。「余嘉錫先生伝略」は『余嘉錫文史論集』（一九九七年、岳麓書社）の巻末に付され、そこには一九二八年に上京し、北京大学ほかの大学で目錄学の講師をしたと記している。そして、今はこの一九二八年説を採る論者が多い。¹²

いま、余氏の「上京時期」と『古籍校読法』『目錄学発微』の成立時期について詮索するのは、この一九三〇年前後は中国目錄学史上、重要な書物が相次いで刊行されているからである。以下にその一部を挙げてみよう。

一九二九年 鄭鶴声・鄭鶴春『中国文献学概要』（商務印書館）

一九三一年 劉紀沢『目錄学概論』（中華書局）

一九三三年 姚名達『目錄学』（商務印書館）

一九三四年 汪辟疆『目錄学研究』（商務印書館）
 一九三八年 姚名達『中国目錄学史』（商務印書館）

こうした書物と余氏『古籍校読法』『目錄学発微』の関係は当然問題になるところである。この年表のどこに『古籍校読法』『目錄学発微』を入れるべきか、各書物の関係がどのようであるのか、検討されなければならない。小論で検討した結果、『古籍校読法』『目錄学発微』の正確な成立時期は判らなかつた。ただ恐らくは一九二八年以降一九三一年までに、『古籍校読法』『目錄学発微』の中でも古い版本が成立していたのではないかと判断できそうである。その理由を三点ほど以下に挙げよう。

まず、『古籍校読法』の書き入れについて検討したところ、国図本一に一九三一年の記年があつた。次に、右に挙げた一九三一年の劉紀沢『目錄学概論』には三度「参用武陵余氏説（武陵余氏の説を取り入れて）」という文が見える。¹³ 武陵余氏は余嘉錫のことである。そして『目錄学発微』とほぼ同じ「古今書目分部異同表」も付されている。取り入れている内容を見ると、『目錄学発微』の講義録をほぼ踏襲しているので、余氏書を目にしてきた可能性が高いと考えられる。つまり劉紀沢は一九三一年以前に『目錄学発微』の講義録を参照していたと考えられる。

ほかに『目錄学発微』東大本一・同大本・関大本・国図本一・国図本五・北京大本に付されている「目錄学籍提要」は、『国立北平図書館館刊』（四卷二期、一九三〇年、国立北平図書館）という雑誌にも掲載されている。そして「目錄学籍提要」は開宗名義本以後省かれているので、「目錄学籍提要」を掲載する版本は一九三〇年頃の版である可能性が高いと考えられる。

最後に、今回の調査の中で発見した一つの本からも成立時期が推定できる。その本は北京大学図書館の古籍善本閲覧室が蔵する馬準『中国目錄学』である。この本は余嘉錫『目錄学発微』の内容をほとんど引き写しているながら、

巻首に「馬太玄述」(「太玄」は馬準の字)とのみあつて、余嘉錫の名はない。非常に多くの問題がある本なので、まず書誌事項を次に掲げたい。

【北京大・馬準『中國目錄學』】(図五)

(図五) 馬準『中国目錄学』



中国目錄學不分卷、付図、馬準撰

一九三二年(序)、手書油印本(活版貼付)、線装、二冊、二
四×九センチ、上冊八三葉、下冊一四五葉(付図六葉)
心形陽文朱印「沈心蕪」。墨筆書入

この本は手書油印本であるが、巻頭の二八葉はその中央部
分を切り抜き両面活版印刷された頁を挟み込んである(図五
左葉参照)。この二八葉分の油印原稿部分の版心葉数を見ると
順序は不揃いで、多くは本書上冊第六十葉代の用紙を用いて
いる。ただし挟み込まれた活版印刷の頁数は、第一篇一頁か
ら三八頁と第二篇一頁から十八頁と整っている。その上、活
版印刷部分最後の第二篇十八頁は、続く油印部分第二篇十九
葉と文章が乱れることなくつながっている。つまり余氏『目
録学発微』と完全に一致している。このようにまず形態が特
殊である。そして北京大学のこの本以外に馬準『中国目錄学』

という本は存在が全く確認できない。油印本はともかくとして、活版本に他の所蔵記録がないことから、活版本は未完成であった可能性が高いと思う。つまり、馬準『中国目錄学』は元来油印本上下冊であったところを、上冊第一篇から第二篇前半十八頁のみ活版印刷が行われたが、それ以後は未完成であったのかもしれない。北京大学蔵本以外にその存在が認められず、また刊記もなく版心などに大学名も記されていない。ただ目首に「國立北平大学藏書」の朱文陽刻印が捺されているので、北京大学が北平大学と称した一九二八年から四九年に収蔵されたと考えられ、印行や製本に北平大学が関わっている確率が高い。

全体は五篇一二章から成り、次に示すように篇名を見ても、余嘉錫『目錄学發微』との違いは殆どない。

目次

- 第一篇 総論：第一章 目錄学之定義及其業用、第二章 目錄积名、
- 第二篇 分論一（体制）：第三章 篇目、第四章 叙録、第五章 小序、第六章 版本序跋（以上上冊）
- 第三篇 分論二（源流）：第七章 漢至三国、第八章 晋至隋、第九章 唐至清
- 第四篇 分論三（沿革）：第一〇章 類例、古今書目分部異同表¹⁵
- 第五篇 目錄要籍書録：第十一章 馬国翰輯本、第十二章 洪頤煊輯本（以上下冊）

内容をより詳しく見ると、時折余氏の文章や語句を改め、まれに資料の省略や増補も行つてはいるものの、全体の構成、内容、引用資料など悉く余嘉錫『目錄学發微』に依拠し、一致する部分は八割から九割ほどになると思われる。更に、馬氏の書と最も近い版は、北師大本系統の三本と北京大本系統の東大本二であると明言できる程、一致しているのである。このような本がなぜ馬太玄の名で活版印刷されたのだろうか。撰者馬太玄の名は巻首（活版

印刷部第一葉、図五左葉)のほか、目次の最後(油印、図五右葉)の序に「太玄」と見えている。

『目録学発微』の刊年は推定であるから、馬準『中国目録学』が余氏書に先行する可能性も皆無ではない。そうすると余氏が馬氏書を参照したことになるが、馬氏書は巻末の目録要籍書録で余嘉錫の名を挙げて『目録学発微』付録の目録要籍提要の説を二回引用している。また、余氏の書が今なお刊行され続けているのに対し、馬氏書がこの一本以外に全く見当たらないことを思えば、やはり余氏の書が先行し、馬氏が余氏書に依拠したに違ひなかるう。

ほかに巻頭には「馬太玄述」と記されているから、馬準の講義を学生が書き取って油印に付したと考えられなくもない。¹⁶ その際馬氏が『目録学発微』を教科書としたのである。しかしそう考えても序文に馬氏は自著を語って「竊に劉向に比す」とまで書き、あたかも自説のごとく強く主張を唱える姿勢には、疑問を感じざるを得ない。

作者の馬準という人物は、不明な部分が多いが、浙江省鄞県出身で、一九三四年に北平民国学院中国文学系教授を務めており、「古籍校読法」を講じたという(橋川時雄『中国文化界人物総鑑』、一九四〇年、中華法令編印館)。

『中国目録学』の中に何度か「私が国立中山大学にいた時……」という句が見えるので、以前は広州にいたらしい。また、章炳麟のことを「章師」と呼んでいるので、師事していたようである。そして馬準には兄がおり、その一人馬裕藻は折しも一九二〇年から三四年まで北京大学国文系主任を務めている。余嘉錫が北京大学に出講した年度は、『北京大学中文系百年図史』¹⁷が調べており、一九三〇年、三五年、三六年を確認している。このように余嘉錫が北京大学に出講していたのは、馬裕藻が国文系主任であった時期に重なる。そして北京大学図書館には余嘉錫が馬裕藻に贈呈したという識語をもつ本もある。¹⁸ このように馬準が馬裕藻を経由して『目録学発微』を入手した可能性は高い。¹⁹ 逆に余嘉錫が馬準『中国目録学』を目にする機会もあったかもしれないし、余嘉錫と馬準の間に面識があつても不思議ではない。ともかく、『目録学発微』の北師大本系統の諸本や東大本二は、この馬準書の存在によって一九三二年以前に成立していたと考えられる。

以上の検討結果をまとめてみると、余嘉錫『古籍校読法』と『目錄学発微』は一九二七、八年以降に北京の大学で講義に用いられ、一九三一、二年に古本は印行されていたと考えられる。一九三〇年頃の中国文献学界の様相は錯綜しているらしく興味深い、今後はその中に『古籍校読法』と『目錄学発微』のより明確な位置を定める必要がある。

注

- 1 『四庫提要弁証』は一九三七年に十二巻を家刻し、完成稿二四巻は没後一九五八年に科学出版社より出版された。『宋江三十六人考実』は『輔仁学誌』に発表した論文を集め、修補を加えて一九五五年に作家出版社より出版。没後に編纂出版された本には、小論で扱う『古書通例』『目錄学発微』のほかに、『余嘉錫論学雜著』（一九六三年、中華書局）、『世説新語箋疏』（一九八三年、中華書局）などがある。
- 2 これら四本を国図本一〜四と略称するが、数字は便宜的に加えたものであり、順序などに意味はない。後の『目錄学発微』における東大本一・二、国図本一〜六も同様である。
- 3 11葉裏には29/10・3/11・5/11と三分の日付が集中しているが、ここは巻一案著録・『宋史』芸文志の部分である。
- 4 家蔵本には「北京大学附設工農速成中學圖書室」の印があるので、工農本と呼ぶことにする。工農速成中学は一九五〇年代にあった中学の名である。
- 5 またこの三本は、版心の葉数「一五」「一六」をそれぞれ「一八」「一九」に誤っている点も一致する。
- 6 每半葉の字数行数を葉数に乗じて計算してみると、北師大本系統の文字数は約五〇九六〇字であるが、国図本六は四三六八〇字であり、約七〇〇〇字少ない。
- 7 意味は「この本は、余氏の完成稿なのかどうかよくわからないが、他の本がないので蔵書として買ってみる。一九四四年六月九日。百金で友人の呉氏が建てた文華閣にて購入。友荒。」ただし日付は旧暦なら七月二八日となる。
- 8 中華書局本『目錄学発微』周序（一九六二年）「著者於一九三二年至一九四八年間在北京各大学講授目錄学時、即以此印

為講義。」巴蜀書社本『目錄学発微』周序(一九八九年)「作者於一九三〇年至一九四八年間在北京各大学講授目錄学時、即以此印為講義教授諸生。」中華書局本『古書通例』周序(一九八三年)「本書則為作者三十年代在北京各大学講授校讀古籍時所写的講義。」

9 『陳垣来往書信集』は陳垣著、陳智超編注、一九九〇年、上海古籍出版社刊。余嘉錫が十一月二十日に送った書簡に「嘉錫在民大所任科目為經学通論、史学通論・中国文学史三種。此数者之中、惟經学所涉稍淺、余則自問尚堪講授。他若目錄・詩文・小説之類、亦平日所嘗用心者也。承諭国学尚缺教師、如蒙推轂、遂獲承乏、是亦昌黎之拳侯喜、東坡之荐棗圃也」とある。

10 『輔仁大学 会友貝勒府』は孫邦華著、二〇〇四年、河北教育出版社刊。その「初歩發展 九、著名学者」に見える。

11 「余嘉錫先生伝略」に「一九二八年携子余遜到北平：在北京大学及其他大学為講師、主講目錄学」とある。

12 たとえば『中国現代學術經典 余嘉錫・楊樹達卷』(一九九六年、河北教育出版社)付録の「余嘉錫年表」、『余嘉錫著作集 古書通例・目錄学發微』の出版説明(二〇〇七年、中華書局)などがある。

13 「参用武陵余氏説」という文は、『目錄学概論』第一章目錄学之起源、第三章目錄学之体例、第四章目錄学之派別に見える。

14 沈心蕪は、『在旅途中』(一九三一年、春草社)や『古文解』(一九三七年、燕京大学国文学会出版)を出版し、『文学年報』(一九三二—四一、燕京大学国文学会)の編輯を務めていた人物。

15 目次には「古今書目分部異同表」の後、更に「古今書目分類沿革表 暫欠」と記されている。

16 たとえば『古籍校讀法』国図本二は撰者名が記されていないから、講義を行ったのは余嘉錫でなくともよいことを示している。

17 『北京大学中文系百年凶史』は温儒敏主編、二〇一〇年、北京大學出版社刊。巻末の「北京大学中文系一〇〇年紀事 一九一〇—二〇一〇」に見える。本書の第九二節には北京大学中文系歴代の主任の名と在任期間が示されている。

18 河野貴美子氏の教示による。識語には「壬申正月」に購入した本を贈呈したとあるから、贈ったのは一九三二年以降のことである。ほかに馬裕藻には『古籍校讀法』不分巻、付「古籍校讀法附録」という著(『文字學大意(音篇)』不分巻と合冊)があり、東京大学東洋文化研究所に所蔵されているが、この本は第一章緒論をもつのみで余氏『古籍校讀法』と内容は異なる。

る。

19 余嘉錫と親交の深かった啓功の『啓功口述歴史』（二〇〇四年、北京師範大学出版社刊。啓功口述、趙仁珪・章景懷整理）には、余氏が「『目錄學發微』更被別人「屢抄不一抄」（這是他自己的話、意思是抄來抄去）」と語っていたことが記されている（古勝氏の教示）。

※ 小論は日本學術振興會科學研究費補助金による共同研究「中國近代文獻學——余嘉錫の総合的研究」の成果の一部であり、七章には古勝隆一（代表）、内山直樹、河野貴美子、白須裕之ら共同研究者の教示の少なからず含まれることを付言しておく。また、その成果は <http://yuji.xi.wordpress.com/> に公開しているので参照されたい。最後に、調査に協力いただいた関係機関にこの場を借りて御礼申し上げる。